
くそったれ聖剣伝

小野 大介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くそつたれ聖剣伝

【Nコード】

N0740BA

【作者名】

小野 大介

【あらすじ】

世界の果てに巨大な扉が聳え立つ世界。人間に家族を殺され、魔物に育てられた少年エクスは、あるとき、父親として敬愛する獅子王ガウエインの命により、魔王ペンドラゴンを脅かす聖剣を破壊するための旅に出たのだが……。

(1)

重ね合わされたガラスに砂粒が当たる。一つや二つではない、無数にだ。

小さくて丸い透明なガラスを通して見えるのは、砂ばかり。暴風に巻き上げられた砂が景色のすべてを遮ってしまっていた。

そこは砂色の世界。

砂嵐の中を、一人の人物が突き進んでいる。吹きつける砂はまるで石つぶてだ。それを避けるため、毛布のような大きい薄汚れた布を、全身を覆わんと頭からかぶっている。

砂から目を守るためのゴーグルが、毛布の隙間から垣間見えている。

二つの目が、ゴーグルのレンズを通して景色を見ていた。金色の瞳だ。

進むこともままならない砂嵐。引き返すこともままならず、右も左も分らない中を、その者は、這ってでも突き進んでいた。

あるとき、突如として風が止んだ。

舞い上がっていた砂が四散し、景色が一瞬にして開けた。しばらくぶりの太陽が見えた。真っ青なまでの空が広がった。そして、見渡す限りの砂の大地が現れた。

砂に埋もれていた人物はむくりと身体を起こし、立ち上がった。

一変して灼熱の大地と化した世界に目を向けた。

どこまでも砂漠が続いている。

そんな中に、砂とは違う色のものが見える。灰色のそれを、ゴーグルのレンズを通して金色の瞳は確認した。

「見つけた……あれが、そうか！」

毛布の下から男性の声がした。若い声だ。

男はかけているゴーグルをずらし、自分の目でもそれを確認すると、途端に駆け出した。細かい砂に足を取られながらも、決して歩

みを止めず、次第に風のように走り出した。

砂が風に運ばれて、波打つような地形を描いている。津波のように急激に盛り上がり、いくつもの砂の山を築いている。

彼は、遠くに見える灰色の目標に向かって、一直線に砂漠を突き進む。進行方向にある山を駆け上がり、崖のように切り立った急な下り坂へと飛び降りた。砂を水飛沫のように舞い上げて滑り降りる。すると、その勢いで起こった風が、彼の身体を覆っている毛布を大きく翻した。毛布の下から彼の姿が現れた。

黒髪の少年。

金色の瞳で真っ直ぐに前だけを見つめる少年。その瞳には曇りがなく、なんとも力強い。

毛布が翻されたことで、彼のいでたちもまたあらわとなった。光を通さぬ漆黒の鎧甲冑。腰には一振りの剣を携えている。

少年は坂を滑り降りると、止まることなく駆け出した。彼の身体を覆っていた毛布が、風によって剥ぎ取られる。彼はそれを横目に確認するも、決して立ち止まらない。

「あそこに眠っているんだ、聖剣が……！」

少年は遠くに見えている灰色の物体を睨むように見つめ、そして、呟いた。

陽炎の幕に遮られた景色の中に、それはぼんやりとだが浮かんで見える。まだ微々たるものだが、距離が縮んだことで、それがなにかしらの建造物であることが見て取れた。

少年はただ一心不乱に走っている。

さきほど、風に剥ぎ取られ、取り残されてしまった毛布は、音もなく砂の上に落ちた。すると、その布がひとりでに盛り上がり、刹那、真っ二つに切断されてしまった。二枚になった布を押し退けるように、砂がまたひとりでに盛り上がり、その下から、巨大な影が現れる。それは、大きな黒真珠のような丸い二つの目で、遠ざかる少年を捉えた。

砂が、また一つ盛り上がる。そうかと思えば、砂の下からなにか

が飛び出した。それは長いもので、その先端には無数の返しがついた鋭い棘が。その棘の先端が遠ざかる少年に向けられる。照準を合わせるような動きを見せたその瞬間、棘が音と共に放たれた。

「！？」

少年はその音に気づいて、慌てて後ろを振り返った。同時に腰の剣を抜き、斬り上げる。刹那、鏡のように磨き上げられた刀身が火花を散らした。

それはまさに一瞬だった。

目の前に無数の返しがついた鋭い棘が迫り、少年は、反射的に斬り捨てようとするも、斬ることも叶わなければ、弾き返すことも出来ず、刀身を滑らせ、軌道をわずかにずらすことしか出来なかった。彼は後ろを振り返ったその勢いのままに回転し、辛うじて、棘の直撃をまぬがれた。

少年の背後の砂が爆発したように舞い上がった。見れば、棘が斜めに突き刺さっている。

「なんだ！？」

少年は棘が飛んできた方角に視線を向けた。自分がいま通ってきた道なき道。すると、景色の一部の砂がひとりでに盛り上がり、それが目まぐるしい速度で彼の元へと向かってくる。目の前に迫ったそのとき、砂の下からなにかが飛び出した。

巨大ななにかが

「くっ！」

少年は反射的に横に飛んだ。刹那、飛び出してきたそれが、激しい音を立てた。それは巨大なまでのハサミだった。砂と同色のハサミ。いまの音はそのハサミが閉じられる際の音だった。

少年が体勢を立て直す間もなく、砂の下からまたもなにかが飛び出す。

「なっ！？」

少年はもう一度横に飛んだ。次に現れたのもまたハサミだった。間髪入れず飛び出してきたハサミをさすがに避け切れず、少年の頬

がわずかだが裂けてしまった。しかし、まだ終わりではなかった。二つの巨大なハサミが出現したことで舞い上がった砂の向こうから、さらなる一撃が！

目の前に迫ったのは、あの鋭い棘だった。

少年は身構えることも出来ず、直撃を食らってしまった。

少年の身体が大きく後ろに弾き飛ばされた。彼がいた場所には、一本の棘が深々と突き刺さっている。

「ぐはっ！」

宙に舞い上がり、放物線を描いて砂に叩きつけられた少年。砂の上を転がり、ようやく止まったと思ったその瞬間、彼は素早く立ち上がり、踵を返し、そして、すぐさま駆け出した。

「砂に助けられた……！」

少年の手には剣が握られていた。その刀身は歪み、一部が大きく欠けてしまっている。

まさに間一髪だった。

少年は咄嗟に剣を盾にしてその身を守ったのだ。おかげで、剣はひどい有り様になってしまった。

少年はまたも、灰色の建造物を目指して走る。いまと前ではその意味こそ違うが……。

逃げる少年を、砂の下から現れた巨大な生物もまた追いかける。六本の細くて長い脚を小刻みに動かし、少年の走りにも負けない素早さで移動する。頭の横についている二つの巨大なハサミをしきりに開閉し、胴体と繋がった長い尾をそり上げ、先端についている棘を少年めがけて発射する。

少年はすぐに気づいて左右に動き回り、飛んでくる棘を巧みに避ける。突き刺さる度に舞い上がる砂に目を細めつつ、決して走ることはやめず、後ろを振り返った。

執拗なまでに追いかけてくる巨大生物、それは巨大なサソリだった。

少年はその目に、砂色の巨大なサソリを捉えた。

「やっと、突き当てたというのに……！」

少年は巨大なサソリを警戒しつつ、前を向き、遠くに見える灰色の建造物を睨みつけた。さらに近づいたことで、彼の目は、それが城であると判別が出来た。

砂に埋もれた灰色の城

少年と、彼を追う巨大なサソリは、その城を目指し、灼熱の砂漠を駆け抜ける。

(2)

それは、一ヶ月ほど前のことだった。

石造りの巨大な闘技場がある。そこでは日夜、大勢の者たちが鍛練に励んでいた。

騒がしくも、活気に満ち溢れた声が、そこでは毎日のように上がっている。

その闘技場の隣に小さな池のある小さい庭があるのだが、そこに一人、剣を振るう者がいる。巧みなまでの剣さばきを見せるのは、黒い髪の少年。

光る汗を飛ばしながら、彼は熱心に剣を振るっていた。

庭から闘技場の様子が垣間見える。ちょうど剣術の稽古に励んでいるところだ。大勢が稽古用の木剣を振るっている。その横で少年は本物の剣を振るっていた。木剣に比べればずっと重たいその剣を、少年は誰よりも早く振るい、立ち回っている。

「エクス！」

声がした。

ちょうど真上から、垂直に剣を振り下ろすところだった少年は、自分の顔と水平になる位置でピタリと止めた。

「……なんだ？」

剣の柄を逆手に持ち直し、少年は横を向いた。

庭と闘技場の間の渡り廊下に、誰かが立っている。漆黒の鎧甲冑を身にまとったそれは、汚れない雪のように真っ白な毛並みを持った、一匹の狼だった。

「ランスロット、おまえか。どうした？」

人間のように二足歩行が可能な身体を持った白い狼を見つめ、少年は、ランスロットと呼んだ。白い狼の彼の名前らしい。

「エクス、ガウェイン様がお呼びだ」

ランスロットと呼ばれた白い狼は、エクスと二度呼ばれた少年の元へと歩み寄る。

「ガウエイン様が？　なんだろう？」

エクスと呼ばれた少年は、少しだけ眉間を寄せた。

「私に聞かれてもな。なににせよ、おまえを呼んでいるのだ。急いだ方がいい」

ランスロットは小さくかぶりを振った。

「分かった、急ぐよ。すまない」

エクスは軽く頷き、池のそばに置いていた荷物を拾おうと歩を進めた。まずは鞘を取り、抜き身の状態である剣を収めた。次にタオルを取り、汗を拭う。剣術の鍛練に相当励んだらしく、身につけている肌着はもう汗でぐっしょりだ。

そんなエクスの姿を、ランスロットはどこか悲しげに見つめている。

「……エクス」

「ん？」

名を呼ばれ、後ろを振り返ると、ランスロットが闘技場を指差していた。

「どうして、闘技場を使わないんだ？」

「ああ……」

ランスロットがそう問いかけると、エクスはまたか、と言いたげな顔をする。

「エクス、おまえは騎士なのだぞ？　私と同じ、獅子王親衛隊の、黒騎士の一人なのだ。おまえには闘技場を使用する権利がある。ガウエイン様を除き、誰もがおまえには逆らえない。それなのに、何故だ……？」

「ふっ」

ランスロットの問いかけに対し、エクスは鼻で笑った。馬鹿馬鹿しい、そう言わんばかりの顔でまた前を向き、さっと荷物を拾い上げた。そのまま、ランスロットから遠ざかるようにしてその場を離

れようとする。

「エクス、待て」

ランスロットはすぐに追いかけて、エクスの肩を掴もうとするも、その手を逆に掴まれてしまった。

「分かっているだろう……？」

悲しみ、淋しさなど、様々な感情を混ぜたような複雑な表情を浮かべ、エクスはそっと呟いた。

「……」

これ以上は聞かないでくれ、そう言われた気がして、ランスロットは、解放された手をダラリと下げた。

エクスは遠ざかる。ランスロットに背を向けたまま、一度も振り返らずに。

「エクス……」

エクスの姿が見えなくなると、ランスロットは横目に闘技場の様子を見つめ、ぎゅっと拳を握り締めた。彼の肩を掴もうとしたその手で。

「どうしてだ……？」

そこに誰もいないのに、ランスロットは問いかける。

「どうして、おまえは人間なんだ……？」

ランスロットは独り言のようにそう問いかけると、サファイアのように鮮やかな青色の瞳で、賑やかな闘技場で鍛練に励んでいる者たちの姿を見つめた。

ちょうど獣の頭を持つ集団が列を成し、掛け声と共に走っている。それが通り過ぎれば、鳥の頭を持った集団が、木剣を手に剣術を稽古に励んでいるのが見えた。

その隣では二足歩行の昆虫たちが体術の稽古をし、その奥では水を自在に操る魚たちの姿も見えた。

他にもヘビやカエルといった爬虫類の姿があり、恐竜のようなでたちをした者の姿もあった。けれど、どこを見ても、エクスのような人間の姿をした者はいない。

人間は、誰一人としていなかった。

荷物をベッドに投げやり、奥の部屋へ。

石の床、壁、天井の部屋に大きなかめが一つ。中にはたつぷりの水が入っている。

エクスは汗を吸った肌着を脱ぎ捨て、裸になると、桶で水をすくい、頭からかぶった。汗を流すついでに、ひんやりとした水で気を引き締めた。

「……くそっ」

エクスは乱暴に桶を捨てて、前の部屋へ。

石の床から、カーペットの敷かれた床へと移った。

エクスはかけられていたタオルを引ったくり、濡れた身体を拭いながらクローゼットの前に立った。

頭にタオルをかぶせて、目の前にある両開きの扉を開け放った。

クローゼットの中には、漆黒の鎧甲冑一式が飾られてあった。

鎧の左胸に、金色の獅子を象徴した紋章が刻まれている。

エクスは新しい肌着に着替え、漆黒の鎧甲冑を順に装着した。ベツドの上に置いていた剣を携えて、最後にマントを羽織った。漆黒のマントだ。鎧の左胸にもある金色の獅子の紋章が大きく描かれている。

エクスはマントを大きく翻し、颯爽と部屋を後にした。

足音を鳴らして廊下を突き進むエクス。ときおり誰かと擦れ違うが、相手は必ず廊下の端に立ち、左胸に拳を押しつけるといふ仕草をする。それは敬礼だ。エクスがその相手をチラリと見やると、誰もが畏縮したようになってしまう。その様子から、彼の位の高さが充分に見て取れる。

その擦れ違う相手だが、全員が人間ではない。

エクスは廊下を突き進み、ある扉の前で足を止めた。

大きな扉のその両脇には二人の人物が立っているが、どちらも人間ではなく、右は馬、左は隼の頭を持つ。両者共に、彼と同じ漆黒

の鎧甲冑を身にまとっている。

「遅いぞ、エクス」

隼の顔を持つ人物は、寡黙な口調でそう答えた。隼だけあってその眼光は鋭い。

「ガウエイン様を待たせるとは、相変わらず、いい度胸してるよな」馬の顔を持つ人物は、どこことなく意地悪そうな物言いをし、歯を出して笑ってみせた。馬だけあって面長い顔をしている。つまり、馬面である。時々だが、笑い声にヒヒンツという声が混じる。

「汗臭いまま、お会いするわけにもいかないからな」

エクスは肩をすくめた。

「なんだ、訓練中だったのか？ ならば仕方ない」

隼は納得したように頷き、すっと目を閉じた。

「おいおい、訓練なんかするなよ。また、差が離れちまう。それ以上強くなるな」

馬は眉を顰め、不満げな顔を浮かべた。

「そうはいくか」

エクスは苦笑した。

「おまえも、少しはエクスを見習い、訓練に勤しめ」

隼は手にしていた槍の先端を馬の顔に向けた。指差すように。

「俺はおまえらのようにスティックにはなれんのよ。　っていうか、槍で指すな、槍で。危ないだろうが、俺の顔は長いんだからよ」

馬は軽く顔を遠ざけ、彼もまた手にしている槍で、隼の槍を軽く弾いた。

「失敬」

隼はすぐに槍を元の位置に戻した。馬が持つ槍とちょうど交差する位置へ。

「それで、準備はいいのか？」

馬は、エクスに問いかけた。

「ああ」

エクスは頷くと、剣を鞘から引き抜き、扉の正面　交差する槍

の前に立つた。

「油断するな」

「死ぬんじゃないぞ？」

隼と馬は同時に槍を引き、大きな二枚扉を押し開けた。わずかに開かれた扉。それでも、エクスには充分通り抜けられる。

扉の奥が見える。数段の階段のその上に椅子があり、そこに誰かいる。

「武運を」

「負けるなよ、でも勝つな」

隼と馬の言葉を受け、エクスは目の前の扉を通り抜けた。すぐに扉は閉められた。

縦に長く、奥行きのある部屋。部屋の奥に見えるのは玉座だ。そこに一人の人物が座し、大きくて長い剣を、まるで杖のように自分の正面に突き立てている。突き立てた剣の柄の頭に両手を乗せて、目を閉じてじっとしている。

金色の立派なまでのたてがみを持つ、老獺な獅子だ。

「待ちくたびれたぞ、エクス」

獅子の目がカツと見開いた。金色の瞳が、同じ金色の瞳を持つエクスを見据える。

「俺を待たせるとはな、おまえも、生意気になったものだ」

獅子はゆっくりと腰を浮かせて立ち上がった。突き立てていた大剣を片手で持ち上げ、素早く一度だけ振り回す。とその次の瞬間、獅子はおもむろに駆け出した。

身構えていたエクスも、獅子に合わせたように駆け出す。

扉と玉座のちょうど中間、両者の剣が交差し、火花を散らした。

「真正面から立ち向かうか、生意気な！」

獅子は嬉しそうに声を上げた。

「俺はいつかあなたを超える！真正面でなければ、意味がないでしょう！」

エクスは吼えた。

「ますます生意気な！」

両者、相手の剣を押し返さんと両腕に力を込める。押せず引かずの力比べだ。そうかと思えば、両者共に相手の剣を弾き返し、軽く後ろに飛んだ。

「ぬう、ならば！」

獅子は大きく息を吸い込み、口から火を吹いた。獅子が持つ大剣の刀身が炎を宿す。

「俺だつて！」

エクスは、剣を横に向けた状態で前に突き出すと、左手に青い閃光を発する稲妻を宿し、刀身をなぞった。刀身が雷を帯びる。

「オオオオッ！」

両者共に剣を振るい、吼え、そして、駆け出した。同時に飛び上がると、相手めがけて剣を振り下ろす。

炎と雷がぶつかったその瞬間、凄まじいまでの閃光がほとばしった。

ドォーンッ！

爆発にも似た音がしたその途端、扉になにかが叩きつけられた。外にいる隼と馬は一瞬、びくりと肩を揺らし、後ろの扉を見やる。扉にはなんら変わった様子は見られない。

「エクス、さらに腕を上げたか……」

隼は鋭い眼光でもって扉を見つめていた。

「激しいなあ、おい」

馬は驚いたことで高鳴った胸に手をやりながら、どこか呆れるような顔をした。

「くそつ、負けた……」

悔しそうにそう呟いたのはエクスだった。彼は扉に張りついていて。背中を押しつけた状態で床に落ち、がくりと膝を落とした。

「辛うじて勝ったか。ふふっ、なかなか力をつけてきておる」

獅子は玉座に上がるための階段の前にいた。嬉しそうにそう呟くと、大剣を一振りし、背負っている大きな鞘に素早く収めた。

獅子はエクスに向かって歩き出した。それに気づいた彼も素早く立ち上がり、剣を鞘に収めて、獅子に向かって歩き出した。

獅子は途中で立ち止まった。それは先刻、両者の剣がぶつかったところだ。その辺りの床だけひどく焼け焦げ、ひどくひび割れてしまっている。

エクスも少し遅れて獅子の前に駆けつける。彼が遅れた理由は両者がいた距離にあった。両者の剣が交わった地点に辿りつくまでの距離が、エクスと獅子では有に倍もあったのだ。無論、エクスの方が遠かった。

獅子はエクスの肩に手を置いた。

「今回はなかなかのものだったぞ。おまえの成長ぶりには目を見張るものがあるな」

獅子は嬉しそうな顔をした。

「ありがとうございます！」

エクスの方がずっと嬉しそうだった。

「訓練に身が入っているな。うむ、いいぞ。私を超える日も、そう遠くないかもしれん」

「そつ、そんな！俺なんかまだ、ガウエイン様の足下にも及びませんよ！」

エクスは驚いた顔をし、慌てて謙遜する。

エクスは、目の前の獅子をガウエインと呼んだ。

「当然だ！……ふつ、なんてな。そう謙遜するな。おまえはもはや、この私に匹敵するほどの力を持つておるぞ」

ガウエインと呼ばれた獅子はエクスの頭に手を乗せた。肉球のある大きな手で彼の頭を撫でてやる。

「……」

無言で、俯き加減のエクスだが、その表情はなんとも嬉しそうだった。頬をわずかだが朱色に染めているその顔つきが、なんだかず

つと幼く見える。

「自分を誇れ。おまえは、この私の右腕なのだからな」

「はい！」

エクスは顔を上げ、真っ直ぐにガウエインを見つめ、力強く返事をした。

「……しかし、また文句を言われそうだなあ」

エクスに合わせるように、ガウエインもまた真剣な表情を浮かべ、彼の目を真っ直ぐに見つめていたが、ふいに足下を見やり、表情をゆるめた。焼け焦げた上にひび割れた床を見やる。

「はい……」

エクスも途端に罰の悪そうな表情を浮かべ、足下を見やった。

二人は顔を上げ、お互いを見合つと、声を上げて笑い出した。

(3)

玉座の背もたれに開いている穴に、鞘に収められた状態の大剣を突き立てると、ガウエインはどつかと腰を下ろした。収められた大剣が玉座の豪華さと威厳をより高めている。玉座そのものが大きな鞘のようだ。

「エクス、おまえを呼んだのはな、ある密命を任せたいからだ」

ガウエインは、玉座から充分な距離を取り、ひざまずいているエクスを見下ろした。

「密命、ですか？」

エクスは顔を上げる。

「ああ、そうだ。……もつと近くに来い。大事な話だ。誰にも聞かletakはない」

「……はい」

手招きするガウエイン。エクスは小さく頷き、すつと立ち上がると、彼の横に移動した。

「これを見る」

ガウエインは懷から折り置まれた紙を取り出した。古いものだ。それも、かなりのもの。材質は羊皮紙。表面が変色し、かなり薄汚れて見える。彼はそれをそつと開いた。

地図だ。大陸の一部分が描かれている。

エクスは畏まりながら、横からその地図を覗き込んだ。

ガウエインは地図のある部分をそつと指差した。

「そこは……砂漠ですか？」

地図には、砂漠を表した簡単な絵が描かれている。その砂漠の一角に印がついている。

「ここから遙か西にこの砂漠はある。エクス、おまえにはこの砂漠のこの印のある場所に向かってもらいたい」

「理由をお訊ねしても？」

「無論だ。ここで、あるものを見つけてほしい」

「あるもの？」

「聖剣だ」

「せつ、聖剣……！？」

エクスは驚いた。思わず声を上げてしまいそうになり、慌てて口を押さえた。そのまま、目だけで真意を問う。

ガウエインはそつと頷いてみせた。

「我らが王、ペンドラゴン様を封じておる、あの忌々しい聖剣について、いまさら説明の必要はないな？」

「はい」

エクスは深く頷いた。

「俺は常々、失われた聖剣を追い求めてきた。すべてはペンドラゴン様を解き放つため。我ら種族が、真に世界の支配者として君臨するため……！」

ガウエインはぎゅつと拳を握り固めた。

エクスはもう一度頷いた。

「長かった……だが、それもようやく報われるかもしれん。ついに突き止めたかもしれん」

ガウエインはもう一度、砂漠の一角にある印の部分を目指す。

「ここにある。失われてすでに久しいあの聖剣がある！……かもしれん。それをエクス、おまえに確認して来てもらいたいのだ。これは非常に重要な任務だ。分かるな？」

「はい」

エクスは力強く頷いた。

「エクス、これはおまえにしか頼めないことだ。俺は、誰よりもおまえを信頼している。おまえ以外に俺の右腕を任せられる者はいないと思っている。そして、なにより、おまえ以外にはこの任務を遂行出来るものはおらん。例え、この俺でもだ。分かるな？」

「俺が、人間だからですね？」

「そつだ……！」

エクスという言葉に、ガウエインは頷いた。

「我らが種族では近づくことも出来ん。近づけば、聖剣の光に掻き消されてしまうだろう。俺はずっと昔、実際に見たからその恐ろしさを知っている。俺の仲間たちは逃げることも出来ず、まるで掻き消されてしまったかのようにだった……」

ガウエインは当時のことを思い出し、身震いしている。よほど恐ろしかったのだろう、動揺が顔に表れている。

「成す術もないとはまさにあのことだろう。俺たちではどうすることも出来ない。聖剣に近づけるのは人間だけだ。その手にすることが出来るのも人間だけなら、破壊することもまた」

ガウエインがそこまで言いかけると、

「人間だけ、ですね？」

エクスが先に答え、そして、問いかけた。

ガウエインはまた、そつと頷いた。

「頼んだぞ、エクス。おまえの手で聖剣を破壊してくれ。あの扉にかけられた封印を解き放ち、我らが王、ペンドラゴン様に、い一度、この大地に立つて頂くのだ……！」

ガウエインは地図を差し出し、もう片方の手でエクスの肩をぎゅつと掴んだ。懇願でもするような目でエクスを見つめる。

「お任せ下さい。必ずや、聖剣を破壊してみせます。俺のこの手で

……！」

エクスは地図を受け取り、ガウエインの目を見つめ返し、力強く頷いてみせた。そして、拳を掲げた。

「頼んだぞ、エクス……いや、息子よ」

「ハッ！」

ガウエインの言葉を受け、エクスの目は潤んでいた。歓喜に満ち溢れていた。彼はいまにも泣き出してしまいそうだが、それを必死に堪えている。

エクスは自らを奮い立たせ、鎧の左胸に刻まれた金色の獅子の紋章に、掲げていた拳を力強く押し当てた。

エクスが旅立ったのは、その夜のことだった。
我が家でもあった獅子王城を人知れず抜け出したエクスは、遙か西にあるという砂漠を目指した。

海岸沿いの道を半日ほど歩き続けたエクスは、とある崖の上にいた。

もうすぐ陽が昇る。

エクスはあるものを見るために、わざわざ足を止めて、その場で待ち続けていた。

空が明るくなり、青みを帯び始めたとき、それは現れた。

大海原の彼方に浮かぶ、巨大などという言葉を遙かに超越した大きさの扉だ。

両開きの二枚扉。

ほんのわずかに開かれているその扉の隙間から、神々しいばかりの小さな輝きが見える。

「あれがそうか……なんという大きさだ……！」

エクスは、その光景に思わず声を上げてしまった。感動にも似た表情を浮かべている。しかし、ふいに曇り、その表情は負の感情の色に塗り潰された。

「あの光！ あれこそ、聖剣の封印……！ あんなものが……あんなものさえなければ、この世界はすでにペンドラゴン様が王として君臨していたはず……人間なんぞ滅ぼされていたはずなのに……くそっ！ 忌々しい聖剣め……！」

エクスは苛立たしそくに奥歯を噛み締めた。ギリリと、歯が碎けんばかりに。

「待っている！ 必ず、俺のこの手で貴様を破壊してみせるからな！ 人間の……この、くそつたれな人間の手によってなっ！」

エクスは神々しいばかりのその小さな輝きに向かって手を伸ばし、鋭い眼差しでキッと睨みつけた。彼の表情には激しいまでの怒りが感じられた。まるで燃えさかる炎だ。

すべてを焼き尽くし、焦がさんとするような憎しみの炎である…。

(4)

そして、今現在。

砂の下から突き出た灰色の瓦礫の周りを、巨大な一匹のサソリが徘徊している。

なにかを探すように、大きくて丸い黒真珠のような二つの目をしきりに動かし、辺りをキョロキョロ。

頭の横に二つある大きなハサミを音を立てて開閉し、そそり立っている鋭い棘のついた尾を振り乱していた。

そんなサソリの姿を、離れたところにある瓦礫の影に身を隠したエクスが、こっそりとうかがっていた。姿を見られそうになり、慌てて顔を引つ込める。

「ハア……」

エクスは小さな溜め息を漏らした。恐怖と緊張感が神経をすり減らす。いやがおうにも疲労が溜まる。その上、砂漠の暑さだ。なにもしていないのに汗が出る。日陰にいても、暑いものは暑い。日光は遮られても、気温の高さはそう変わらない。

エクスは頬から顎へと伝い流れる汗を腕で拭い、また、瓦礫からそっと顔を覗かせた。サソリを観察する。

「一番、厄介なタイプに出遭ってしまったな……せめて、言葉の通じる相手なら、いくらでも対処のしようがあるのに……野良の、それも知能の乏しい昆虫のタイプか……あれ？ サソリは昆虫だったか……？」

砂と同色の、いわゆる保護色の外殻で全身を覆っている。強固な印象が見受けられる。見た感じはまるで岩のような質感だ。きつと硬いだろう。それは先刻の一撃でも十二分に分かった。

エクスは手にしている剣を見やった。歪み、一部が抉れたように欠けてしまっている。

エクスはゴクリと生唾を飲み込む。暑さで喉が渴いたのか、それとも……。

「気に入っていたんだが、もう使い物にならん……」

エクスは残念そうに呟いた。

サソリがまた近づいてきたため、素早く顔を引っ込める。

「直接攻撃は無謀だな。あの岩のような外殻だ、弾かれるのが目に見えている……ならば、魔法はどうだ……？」

そんなことを呟きながら、エクスは横目に、そう遠くない場所にある砂に埋もれた城を見やった。

旧文明の時代に建造されたと思われる古い城。城というよりは、もはや遺跡と呼ぶのが正しいだろう。

砂と風に表面が削られ、長い年月に朽ち果て、半ば倒壊寸前といったところだ。大きく傾いているように思える。

あそこに、聖剣が隠されているのだろうか……？

エクスはふと思った。

「いつそ、逃げ込むか……？」

内部に通じていると思われる穴が見える。そう距離はなく、走ればすぐだ。

エクスはいつでも走り出せるようにと身体を起こし、また、そつとサソリの様子をうかがうべく、顔を覗かせようとした。その瞬間、目の前にハサミが迫っているのに気づいて慌てて飛び出した。

ハサミが瓦礫を貫いた。瓦礫は一撃の元に崩壊。咄嗟に飛び出し、ていたエクスは、すぐさま駆け出し、もう片方のハサミの一撃と、崩れた瓦礫の下敷きをまぬがれた。

「ギリギリだった……！」

エクスは一直線に遺跡の入口を目指した。後ろからサソリが追ってくる。見た目に反し、非常に動きが素早い。瓦礫を盾にしようとするも、サソリの力は恐ろしく強力で、簡単に破壊されてしまい、盾にもバリケードにもなりはしない。が、少しの時間稼ぎにはなってくれた。

エクスは遺跡に飛び込むや否や、素早く身を隠した。彼を追い、サソリも遺跡の入口を突破する。小さな穴を大きな穴にしてしまった。

サソリが遺跡に入った頃にはもう、エクスは隠れてしまっていた。エクスを見失った。サソリは入口のすぐのところで止まり、黒真珠のような目で辺りをうかがう。

広い空間がそこにはあった。元が城であったことを表しているように、正面には大きな階段が見え、周りには太く丸い石柱が何本も連なっている。いずれも砂に埋もれている。階段だが、途中で崩れてしまっていて、二階へは行けそうにない。

サソリはエクスの姿を見失ったが、一方の彼は常につながっていた。

「まずは、炎だ……！」

赤い光が発された。サソリはすぐさま反応し、その光に身体を向けた。

とある石柱の裏、赤い光が発されたと思ったそのとき、隠れていたエクスが飛び出した。彼の手は燃えさかる紅蓮の炎に包まれていた。彼がその手を、サソリに向けて突き出したその瞬間、炎は塊となって放たれた。

放物線を描くように宙を飛ぶ炎の塊。吸い込まれるようにサソリに着弾した。その刹那、爆発でも起きたように炎が一瞬にして膨れ上がり、サソリの巨体を飲み込んでしまった。しかし、サソリは何事もなかったかのように、逃げるエクスを猛烈な勢いで追いかける。その際、砂を激しく巻き上がり、身体を包んでいた炎は掻き消されてしまった。

「くっ、ダメか！」

命中したことを喜ぶ間すら与えられず、エクスは迫り来るサソリから逃げる。

サソリはエクスが隠れていた石柱を、ハサミの一撃で根元から切断した。

「ならば、次は氷だ！」

エクスは逃げ続けながら、手を頭上へと伸ばした。彼の手が青く輝く。すると、空中に突如として氷の塊が出現し、それはひとりでに形を変えて鋭利な氷柱と化した。エクスは逃げるのを利用して空中にいくつもの氷を生み出し、サソリが迫ってきたその瞬間を見計らい、伸ばしていた手をサソリめがけて振り下ろした。その手の動きに合わせたように、空中に浮かんでいた氷柱が一斉に飛び出す。その鋭い先端でもってサソリを襲う。だが、サソリの頑強なまでの甲殻が決して通さず、いくつもの氷柱は意図も簡単に弾き飛ばされ、ハサミで打ち砕かれてしまった。

「氷もダメなのか……！？」

炎もダメ。氷もダメ。エクスは戸惑い、一瞬ではあったが動揺してしまった。その隙に一気に差を縮められてしまう。

サソリがハサミを振り上げた。

「！？」

ハツとし、エクスは走っている方向へ飛び込むようにして、間一髪のところではサミをかわした。ハサミは壁を貫いた。

次が来る

エクスはさらに飛んだ。案の定、もう一方のハサミが壁を貫いた。さらには尾の一撃。壁は見事に粉碎し、瓦礫を辺りに飛び散らせた。「ぐっ！」

飛んできた瓦礫に頭や背中を打たれ、エクスは苦痛に顔を歪めながらも、決して走り止めず、入口から見て左右一つずつある通路の一方へと逃げ込んだ。

サソリも後に続かんと、その通路に押し入ろうとするも、エクスには十分な広さがある通路でも、サソリにはかなり狭く、入口のところでつかえてしまう。

古城の入口の壁は薄くて突き破ることは出来たが、通路を仕切る壁は頑丈で、なかなか破壊出来ず、サソリは立ち往生している。ハサミを伸ばしてエクスを捕らえようとするも、彼はこれぞ好機とば

かりに、足早に奥へと逃げ込んだ。

「助かった……！ このまま、やり過ごせたら……」

通路を駆け抜け、最初の分かれ道を曲がる。とにかく、身を隠してやり過ごそうとさらなる奥を目指そうとしたその瞬間、背後で轟音が

外の壁を突き破り、サソリが飛び込んできたのだ。

「なっ」

エクスは慌てて後ろを振り返り、砂と共に迫ってくるサソリの姿を目の当たりにするや否や、すぐさま駆け出した。と、その瞬間、身体がバランスを失った。

まるで、宙に放り出された気分がし、ハッとして前を見れば、そこには穴が！

「しま……っ」

サソリに気を取られ、床が落ちていたことに気がつかなかった。

エクスは悔やむことも出来ず、その間すら与えられず、巨大な生物の口のように開いた穴に飲み込まれてしまった。

「うわああああああ　っ！？」

エクスは砂と共に落ちていった。

狭い通路を無理やりに押し入ってきたサソリが穴の手前に現れる。吸い込まれるように穴へと落ちていったエクスの姿を、黒真珠のような二つの目で覗き込むようにうかがう。

エクスの声は穴の向こうから聞こえている。しかし、間もなく途絶えた。

サソリは穴の手前に留まり、じっと穴の中をうかがいながら、音を立ててハサミを開閉していた。

(5)

砂が滝のように流れている。細く長い滝だ。太陽の光がわずかながら降り注がれているその滝つぼには、大きな砂の山が造られている。その山の頂になにかが落ちた。

斜面を転がり、砂を巻き上げながら麓へ。

ようやく止まったそれは、エクスだった。

「ゴホッ！ ゲハア……ッ！」

エクスはひどく咳き込み、脇腹を押さえながら、砂まみれになった身体をなんとか起こした。

全身がひどく痛む。特に脇腹が痛い。

「うぐ……まっ、また、砂に助けられたか……」

エクスは身体の痛みを堪えながら、ゆっくりと空を見上げた。チラリとだが空と太陽が見える。そこは筒状のとても広い空間だった。空洞だ。といっても、洞窟のような自然なものではなく、周囲は石材で組まれた壁に囲まれており、空と太陽までには大穴の開いたいくつかの階層も見える。

ここは古城の内部　つまり、地下なのだろう。

どこから落ちてきたのかはまるで分からなかった。しかし、かなりの距離を落ちてきたことは覚えている。普通ならばまず助からない高さだが、砂の山が衝撃を吸収してくれたのか、全身に鈍い痛みと、脇腹に刺すような痛みがあるだけで死んではおらず、辛うじてではあるが立ち上げられる。運が良かったとしか言えないだろう。

「ああっ!？」

ふらつきながらも立ち上がり、周りの景色に目を向けていたかと思えば、エクスは突然声を上げた。大声を上げたものだから脇腹に痛みを覚え、背中を丸めた。

「しまった……剣を……」

剣を落とした

エクスは痛む脇腹を押さえていた右手を見つめ、そう呟いた。そうかと思えば、素早く砂山の頂を見上げ、痛みに堪えながら、足早に山を駆け上がる。

「最悪だ……！　こんなときに、どうして……！？」

何度も転びそうになりながら砂山を登り切ると、その場にうずくまり、犬のように砂を掻き分け始めた。しかし、掘れども掘れども、砂ばかり。なにも出やしない。

「どこだ……どこだよ……！？」

掘るのをやめて周りを見渡し、落下の際に手放してしまった剣を探すエクス。そのとき、急に辺りが暗くなった。太陽が雲に隠れてしまったときのようなその現象に、ハッとして空を見上げたエクスの目に飛び込んできたのは、巨大なサソリの裏側だった。

「わっ！」

声を上げると共に、反射的に飛び出したエクス。地面を蹴るも、砂に足を取られ、また山を転がり落ちた。その刹那、サソリが砂山の頂に落ち、その衝撃で、砂山の半分以上が吹き飛んでしまった。その中にはエクスの姿もあった。

「うわあっ！？」

大量の砂と共に吹き飛ばされてしまったエクス。宙に舞い上がったその瞬間、エクスの目がなにかの光を捉えた。

「！？？」

太陽の光を反射させる物体があった。

エクスは誘われるようにその光を目で追った。共に宙を飛ぶ大量の砂。その中に、光を反射させるなにかが

「あつたっ！」

地面に激しく叩きつけられたエクス。砂煙を巻き上げ、転がりながらも、その目だけは光を追い続けている。

光を反射させるそれもまた、エクス同様に放物線を描くように宙を舞うも、砂の下から突き出していた岩のような瓦礫に当たり、跳ね返るようにまた宙へと舞い上がった。

回転しながら天高く上がる。太陽を遮り、シルエットとなって浮かび上がったそれは、一振りの剣。

エクスはすでに駆け出していた。空に舞い上がった剣だけを見つめて。

サソリもまた動いていた。六本の細く長い足を小刻みに動かし、見かけによらぬ素早い動きでエクスを追って背後に迫り、ハサミを振り上げる。

砂の下から突き出していた瓦礫を足場に飛び上がり、エクスは手を伸ばした。

回転して落ちてくる剣が目の前に迫る。

エクスを追ってサソリもまた瓦礫に登る。空を見上げる形となり、振り上げていたそのハサミを、形としてはさらに振り上げて、さらなる空へと飛び上がっているエクスを捉えんと突き出した。

エクスの手が剣の柄を掴んだ。

サソリのハサミがエクスの胴体を捉えた　かに思えたその瞬間、一筋の閃光がほとばしった。

塊が地面に落ち、砂を撒き散らした。わずかに遅れて、エクスが地面に着地する。

「……」

エクスは言葉を失くし、目の前に落ちた塊を見つめた。それは砂と同色の、岩のように表面がごつごつした、鋭い棘のような物体。それはサソリのハサミの一部だった。

瓦礫に登ったまま、サソリは黒真珠のような目で、一部を失った自分の片方のハサミを見つめ、開閉が出来ないことを確かめている。砂に突き刺さった、元は自分の身体の一部だった岩のような棘を続けざまに見やる。

両者共に落ちた棘を見つめ、そして、ふいに目が合った。

「……いけるっ！」

エクスはにっと笑い、そして、声を上げた。

その途端、サソリが大きく後退した。尾を反り返し、鋭い棘をエ

クスに狙い定める。

「オオオオ！」

エクスが素早く駆け出した。

その動きに反応し、サソリが棘を発射する。一つ、また一つと。

エクスは素早く左右に移動して軽快に棘をかわす。棘が砂をえぐり、砂を巻き上げる。瓦礫を貫く。

エクスは飛び散る砂に目を細めるも、決してサソリから目を離しはしない。

「ハアツ！」

エクスの左手が青い火花を散らした。強い放電が起こり、閃光がほとばしった。決して足を止めず、エクスはその左手で、剣の刀身を根元から切っ先に向けて素早くなぞった。刀身に稲妻が走り、雷が宿った。

エクスは青く発光する剣を振るい、身構えた。

何本もの棘を連続して発射するも、どれ一つとしてかすりすらないことに業を煮やしたのか、サソリは自ら前進。開閉出来なくなった片方のハサミを突き出して、大きく横に薙ぎ払った。

エクスはすかさず地面を蹴って空中に飛び上がる。その下をハサミが過ぎる。

サソリはもう一つのハサミを、エクスめがけて突き出した。

エクスは空中でその身をねじり、回転。迫り来るハサミを紙一重のところであわした。あまりに紙一重だったため、頬がわずかだが裂けてしまう。もう一方の頬も先刻に裂けており、両方が裂けたことに。さらに、ハサミがかすった鎧の胸元が火花を散らした。

一撃、二撃と見事にかわしたエクス。着地するや否や、再び、飛び上がる。その刹那、彼が着地した地点に、棘が長い尾ごと突き刺さった。

「邪魔だ！」

エクスは素早く剣を返し、斬り上げた。サソリの尾を一刀両断。その勢いのままに剣を振り上げ、くるりと回して逆手に持った。両

手で柄をぎゅっと握り締めると、鋭く尖った切っ先をサソリに向けた。

「これで、どうだあああああつ！」

サソリの背に落ちるエクス。体重をかけ、剣の切っ先をサソリの背に突き立てた。岩のような外殻を突き破り、貫き、剣は深く食い込んだ。次の瞬間、刀身に宿されていた雷が一気に解き放たれ、凄まじいまでの放電を起こした。

サソリの全身が青く発光する。と同時に激しいまでの痙攣を起こした。すべての足と、尾がぴんと伸びる。

降り注がれている太陽の光を押し返さんばかりにサソリは青く発光した。

すべての光と放電が途絶えると、サソリはすべての足や尾をぴんと伸ばした状態のまま、ズシリとその場に突っ伏した。その途端、サソリの全身から湯気が立ち上った。同時に、ひどく焦げた臭いが辺りに立ち込める。

絶命したのか、サソリはぴくりとも動かない。

「……」

サソリが完全に動かなくなっただけでしばらくしてから、ようやくエクスは動いた。その場に立ち上がり、突き立てていた剣をそっと抜き取った。そうかと思えば、エクスはぐらりとふらつき、そのまま、サソリの背中から転げ落ちてしまった。

「ハア……ハア……！」

エクスは砂の上に仰向けになり、肩で息をした。それをしばらく続けたエクスは、またゆっくりと立ち上がり、サソリから遠ざかる。まだ息が乱れており、何度もその場に倒れそうになりながらも、這ってでもその場を離れた。

サソリから十分な距離を取ると、エクスはその場に突っ伏した。大きく深呼吸する。

「いつ、生き延びた……！」

エクスは仰向けの状態で拳を掲げるように突き出した。その左手

の拳を、今度は力強く鎧の左胸の金色の獅子の紋章に叩きつける。
勝ち誇っているかのようだ。

「もうごめんだ……勘弁してくれ……」

エクスはしばらくそのままだった。呼吸が整い、ようやく落ち着けたところでむくりと上半身を起こし、そのまま立ち上がる。剣を一振りし、慣れた手つきで鞘に収める　が、途中でつかえてしまった。

「ああ、そうか、歪んでしまったんだ」

エクスは思い出したように残念そうな顔を見ると、ふと剣を見やった。しかし、なんら歪んでいるようには見えない。真っ直ぐな刀身がそこにはあった。

「あれ……?」

エクスはキョトンとした。一瞬、思考が停止してしまった。想像していたものと違ったものが目に映ったからだ。

歪んでいるものと思っていた刀身はなんら歪んではおらず、しかし、その刀身はなにかおかしかった。見ると、鏡のように美しく磨き上げられていたはずの刀身が赤茶色に変色しており、まるでひどく錆びついてしまったようだった。また、腰に携えている鞘と比べると、その刀身は長さも幅もまったく異なるものだった。つまり、それが違う剣だった。

「えっ!?!」

エクスは驚いた。びっくりと肩を揺らした。思わず後ずさりしてしまった。と、砂に足を取られ、後ろ向きに転んでしまった。咄嗟に受け身を取ろうと左手を突っ張ったのだが、その瞬間、その手に痛みが走った。

「つつ……!?!」

慌てて手を見れば、手のひらが切れてしまっている。じんわりとだが血が滲んでくる。なにかで切ったようだが、一体、なにで切ったのか?

エクスは砂の中になにかを見つけた。光るものだ。掘り起こすと、

それは一振りの剣。一部が欠け、刀身が歪んでしまっているそれこそが、愛用していたはずの剣だった。

「え、じゃあ、これは……？」

エクスはあらためて、手にしている剣をじっと見入った。

赤みを帯び始めている太陽の光を受けて、刀身がより鮮明に赤茶色に染まってみえる。それは錆だ。刀身だけではなく、剣そのものがひどく錆びついてしまっている。錆の塊と言ってもいい。

エクスはハツとした。そして、考えた。

こんな錆びついた剣で、どうしたらあのサソリの強固なまでの外殻を突き破れる？

岩と大差ないハサミを切断出来た？

とてもじゃないが可能だとは思えない。不可能だ。では、何故だ……？

「まっ、まさか、これは……？」

聖剣

「うわあっ！」

頭の中で囁いた自分の言葉に、エクスは驚いた。思わず、声を上げた。眺めていた剣を投げ捨てようと、慌ててその手を振り上げ、そして、振り下ろした。すると、彼は突然、前のめりになるように倒れてしまった。顔から砂に突っ込んだ。

「！？？」

訳が分からなかった。エクスは砂塗れの顔を素早く上げると、四足になったその体勢のまま、もう一度剣を投げ捨てようとする。しかし、剣を掴んだままの手が砂に叩きつけられてしまった。

どうなっているんだ……！？

捨てたくとも捨てられない。何度捨てようとしても失敗する。何故ならば、手が剣から離れないからだ。いや、正しくは、剣が手に張りついてしまっているのだ。

「なっ、なんだよこれ……！？」

手を開いてみても剣が落ちない。手のひらにピッタリと張りつい

ている。

「そんな馬鹿な……！？」

無理やりにも剥がそうと、エクスは右手を開いたまま、剣を左手で掴んで引つ張った。すると、苦もなく外れてしまった。一瞬拍子抜けしたエクスだが、すぐに気づく。今度は左手に張りついている。

「くそっ！」

エクスは剣を砂に押しつけた。その上から踏みつけて、体重をかけたまま、左手を剥がしにかかる。しかし、一向に外れない。引つ張っている手が痛くなる。その上、引つ張る力が強いからなのか、身体が浮き上がってしまい、後ろ向きにひっくり返ってしまった。本当にびくともしない。

「だったら！」

エクスはおもむろに立ち上がり、剣を左から右手に持ち替えると、倒れているサソリの元へと向かった。そして、またおもむろに剣を振り下ろした。

スパッ！

サソリの岩のように硬い外殻めがけて、わざと刃を外して叩きつけたその瞬間、なんの抵抗もなく太刀切れてしまった。

「なっ」

一瞬、砂までが深く切れてしまったその恐ろしいまでの切れ味に、エクスは絶句した。しかし、負けずとまた剣を振り上げて、何度も、何度も、サソリに叩きつけた。けれど、ただサソリの死体が細切れになるだけ。

「くそっ！ くそおおおっ！」

エクスはひどく苛立ち、暴れるように剣をぶんぶん振り回し始めた。サソリでは効果ないと知れば、砂の下から突き出している瓦礫でも試し、さらにはこの空間を囲っている壁でも試した。しかし、

いずれも、意図も簡単に切れてしまう。まるで、熱したナイフでバターを切っているような、そんな感触だった。

「ハア……ハア……！」

疲労し、崩れるようにその場にしゃがみ込んだエクス。肩で息をし、額に汗を浮かべ、じっと自分の手に握られたままの剣を見つめる。

剣を持つ手が震え出す、小刻みに。それは徐々に激しさを増す。ギリギリと奥歯を噛み締めるものだから、顎まで震える。その震えはいつしか全身に広がり、そして

「くっ、くそつたれええええええつ！」

エクスは天を仰ぎ、心の底から叫んだ。

(6)

より色濃く染まった赤い太陽のその下で、エクスは、しゃがみ込むような体勢のまま、どうしても離せない剣を見つめていた。その目は涙で潤んでいる。

「すみません、ガウエイン様……俺、俺……」

一粒、また一粒と涙がこぼれ落ち、剣を握り締めている手に当たって弾ける。

「ふぐう……」

必死に堪えようとしていたエクスだが、我慢にも限界は訪れ、ついには泣き出してしまった。落涙である。

ヘナヘナと力を失い、なんともクヨクヨしているその様子は、自分よりも遥かに大きなサソリを相手に苦戦を強いられながらも見事に立ち回り、勝利をその手に掴み取ったさきほどまでのエクスとはまるで別人であった。

年の割にどこか大人びて見えていたエクスはいなくなり、その代わりに、弱々しくて、ずっと幼い少年がいた。

「どうしよう……本当に、どうしたら……」

エクスは手で顔を覆い隠そうとした。すると、剣が一緒についてきたものだから驚いてしまった。慌てて剣を遠ざけ、片手だけで顔を覆う。

「間違いない……これは、聖剣だ。絶対にそうだ。そうじゃなきゃ、あの切れ味は説明がつかない……」

先刻、気が動転して暴れ、切り刻んだものを指の間から覗き見るように確かめながら、エクスは呟いた。

「確証はないけど、仮にこれが聖剣だったとして、これからどうすればいいんだ……？　こんなものを持ったままじゃ、ガウエイン様の元へは帰れない。帰れるわけがない……！　そんなことをしたら、ガウエイン様を危険に晒す上、失望させてしまう……！　やっぱり

人間なのかわかれる……」

エクスはいまにも消え入りそうな弱々しい声でそう呟いた。彼はひどく怖がっている。恐れているのだ、脳裏に思い描いた光景に……。

「人間の味方だなんて思われたら……もう最悪だ、死んでしまいたい……」

エクスはまたクヨクヨとし、また、ボロボロと涙をこぼし始めた。いまにも声を上げて泣き出しそうだ。

そんなエクスの姿を、遠くからうかがう視線があった。

「勇者さま……？」

砂の下から突き出している瓦礫の間に二つの目が浮かんでいる。

エクスのことをじっと見つめていた。彼の背中を。

そのとき、瓦礫の一部が崩れた。

「！？」

エクスはハツとし、素早く後ろを振り返った。そして、素早く立ち上がり、涙を拭う。

「誰か、いるのか……？」

エクスは景色に問いかけた。だが、返事はない。しかし、気配はあった。

二つの目の主は瓦礫の後ろに身を隠し、手で口を押さえて息を潜めていた。

「……いる」

エクスは確信したように呟いた。彼の顔つきが変わる。幼顔から、再び、大人びた顔へ。

エクスは剣を構え、気配を感じる瓦礫に近づいた。一步、また一步と。すると、瓦礫の後ろでなにかが動いた。横へと飛び出したのは人影だった。逃げるように、いくつか散乱している瓦礫を縫うように走り、彼から遠ざかるうとしていく。素早い動きだ。

「待て！」

反射的にエクスも飛び出した。瓦礫に飛び乗り、別の瓦礫へと飛

び移って人影を追う。すぐに追いつき、飛びかかった。

「キャッ！」

人影を背後から押し倒し、そのまま取り押さえる。馬乗りになり、剣の切っ先を喉元に突きつけた。そのとき、相手を押さえつけているその手に、妙に柔らかな感触が……。

「！？」

エクスはギョツとした。見下ろしているその先にいたのは人間だった。女性だ。少女だ。つまり、彼の手が触れているのは、その少女の……。

「うわあっ！」

エクスは文字どおりに飛び上がった。目の前の少女から慌てて距離を取る。そのまま、後ろ向きに歩いてさらに遠ざかるうとするのだが、背後に瓦礫が

エクスはつまづき、ひっくり返ってしまった。

尻餅をついた状態でなおも下がろうとするエクス。彼はひどく驚いていた。激しく動揺していた。何故なら、人間の、それも異性を、これほど間近で見た上、触ったのは初めてだったからだ。

「お、お、お、女……！？」

瓦礫があり、それ以上後ろに下がれないという状態になったエクスは、剣を突き出し、威嚇でもするような仕草をした。近づくなど言わんばかりに。

「……！」

そんなエクスが握り締めている剣を、少女はじつと見つめ、そして、なにを思ったのか、おもむろに立ち上がり、彼の元へと駆け寄った。

「なっ、なっ、なっ！？」

戸惑うエクス。

少女は彼の目の前で膝を折ると、突きつけている剣に触れながら、その目を輝かせた。

「ああ、やっぱり！ 勇者さま！ あなたが、勇者さまなのですな

！」

少女はエクスを正面に見据えると、胸の前で両手を組み合わせた。
「ゆっ、勇者……！？」

近づいてきた少女に怯え、必死に、さらに下がろうとしつつ、エクスは、彼女の言葉を疑問形で繰り返した。

「ああ、勇者さま！ あなたさまが来られるこのときを、ずっと、ずーっと心待ちにしておりました！ ついに来て頂けたんですね！」
少女はとても喜んでいいる。全身でその喜びを表さんばかりだ。

「ちっ、違っ……違っっ！」

エクスは声を荒げた。目の前に迫っている少女を突き飛ばして立ち上がる。

「勇者さま……！？」

戸惑う少女。

「違っ！ 俺は勇者などではない！ 断じて違っ！」

エクスは少女に剣を突きつけ、鎧の左胸に刻まれている金色の獅子の紋章を掴むように手を添えた。

「俺はペンドラゴン王に仕える三大家臣の一人、將軍、獅子王ガウエイン様をお守りする獅子王親衛隊の一人、黒騎士のエクスシア」
「エクレールだ！」

エクスは大声でそう叫んだ。

少女は意味が分からないとばかりにキョトンとしている。

「勇者さま、ではないのですか……？」

少女は恐る恐る問いかけた。

「当たり前だ！ 勇者なんぞと間違われてたまるか！」

エクスは、再び、声を荒げた。

「そ、そんなあ……」

エクスの返答を聞くや否や、少女は途端に残念そうな顔をした。
ガッカリしているのが見て取れる。ひどい落胆ぶりだ。

「なんなんだ、まったく……」

エクスは眉間にしわを寄せた。だが、ようやく少女が離れたので

どこかホツとしている。

「じゃあ、どうしてその剣を持つてるんです？」

少女は唇を尖らせながら問いかける。

「ん？ ああ、それは、こいつを破壊するためにだな……」

エクスは無意識にそう答え、錆びついた剣を掲げてみせた。

「ええっ!？」

その言葉に、少女は飛び上がりばかりに驚いた。

「ダッ、ダメです！ ダメですよ、壊しちゃあ！」

少女は慌てて、エクスの剣を掴んでいる側の腕に飛びついた。

「ひいっ!」

エクスは驚き、情けない声を上げた。

「それは、とつてもとつても大切なものなんです！ 壊さないで！

お願いします！」

少女はエクスの腕にしがみつき、懇願でもするように発言した。

「はっ、離れる！ 離れないか！」

少女を振り解こうとするエクス。

「いやです！ いゝやゝ！」

しかし、少女は頑なに離れようとせず、さらにしがみつく。

「離れる！ 離れるって！ 頼むから離れてくれ！ はっ、離れて

下さい！」

焦り、気が動転するあまり、エクスの言葉が敬語になっている。

「きやう！」

強引に少女を引き剥がすと、エクスは後ろの瓦礫をよじ登り、見上げるようなその頂に立った。追いかけられた猫が木にでも上ったようだ。

「来るな！ 寄るな！ 近づくなあ！」

エクスは少女をひどく警戒し、剣の切っ先を向けながら、必死に威嚇している。

「お願いですから、聖剣を壊さないでえ……!」

引き剥がされた際に尻餅をついてしまった少女は、見上げる位置

にいるエクスを見つめ、再び、懇願を。

「聖剣……！？　そうか、やっぱりこれは聖剣なんだな……！」

エクスは少女の発した言葉にハツとし、掴んでいる剣をキツと睨んだ。そのとき、彼はふとあることに気がついた。祈るような仕草をしている少女を見やる。

「おい、おまえ」

少女に話しかける。

「はっ、はい……？」

少女はびっくりとし、返事をした。

「おまえは何者だ？　どうして、こんなところにいる？　おまえはこいつと　この剣と、どんな関係がある？」

エクスは剣を掲げながら問いかけた。

「わっ、私は、代々この地に留まり、そして、生き、聖剣を見守ってきた一族の末裔です。と言っても、もう、私だけなんですけどね

……」

少女はふいに俯き、悲しそうな顔をする。

「聖剣を見守る一族……？　ならば、こいつのことには詳しいわけだな？」

こいつ、とは聖剣のことだ。

「え？　あ、はい、まあ」

「ならば教えろ！　どうすれば、こいつを手放せる！？」

エクスは瓦礫から飛び降り、自ら、少女の前へ。そして、脅さんばかりの勢いで、剣の切っ先を向けた。

「え！？　え！？」

戸惑う少女。

「さっさと教えろ！　殺されたくなければ、いますぐにだ！」

エクスは剣の切っ先をさらに近づけた。錆びついているとはいえ、尖ったその切っ先が顔の前に迫り、少女は思わず息を呑んだ。

「……」

少女は負けずと口を閉ざす。

「だんまりか。いいのか？ こいつを海に捨ててしまおうぞ？」

「えっ、ええ……！？」

少女が口を閉じていたのはほんの一瞬だった。

「こいつを手放せなければ、俺は死んだも同然なんだ！ ならいっそ、このくそつたれな聖剣共々、心中してくれる！ 俺は本気だぞ！」

エクスはひどく興奮し、まくし立てた。彼のその姿や表情からは、どこかやけくそさが感じられ、少女は思わずゾツとした。

「分かりました！ お教えしますから！」

本当に捨てかねない。そう判断した少女は慌てて応じた。

「ならば、言え！ いますぐに！」

「はいっ！ えーっと、私たちの一族に伝わる教えですと、一度でも聖剣に触れると、その者は所有者として選ばれ、その者に死が訪れるそのときまで、半永久的に聖剣を手放せない……だったと思いますけど……？」

少女は思い出しながら、上目遣いになって答える。

「なっ」

少女の言葉に、エクスは愕然とする。頭を殴られたような衝撃を受けている。

「ああ、でも！ 半永久的です！ ですので、ある条件を満たせば一時的ではありますが、聖剣を手放せるはず……です！」

エクスの様子を察し、少女は慌てて答えた。

「ほっ、本当か……？ その条件とは！？」

エクスの目に力が戻った。

「剣は、鞘に収められることで眠りにつきます。鞘から抜かれている間は決して休まず、持ち主を守ります」

「鞘？」

エクスはふと自分の腰に携えている鞘を見た。

「はい、鞘です」

少女はそうだと言わんばかりにエクスの鞘を指差し、頷いた。

「鞘か。……で、その鞘はどこにある？」

エクスは辺りを見渡し、鞘を探した。

「え？ ここにはありませんけど」

「え？」

エクスは聞き返した。

「え？」

聞き返されて、少女もまた聞き返す。

「無いって……どうして無いんだよ！？ どこにあるんだ！？」

エクスは声を荒げた。

「ええ！？ だっ、だって、鞘は、冥府の門を封印するため、あちら側の世界に……！」

少女はどこかを指差した。

「！？」

エクスはハツとした。

「ああ、そうか……そういえば、そうだった……」

エクスはなにかを思い出し、愕然とした。

エクスの脳裏に、およそ一ヶ月前に見た、大海原の彼方に浮かび上がった、巨大な扉の光景が甦った。

あの、神々しいばかりの光

「そうだった、ペンドラゴンさまのお力を恐れた愚かな人間共が、神を謀り、手に入れた聖剣の力で、あの門の向こう側へと追いやつてしまい、聖剣の鞘を扉のかんぬきの代わりとして封印を施してしまつたのだつたな……」

エクスは思い出しながらつらつらと早口で語った。

「あれ、そんな話でしたっけ……？」

少女はなにかを思い出すときのように、右上を見る仕草をした。

「ならば、鞘は、現存しないということか……？」

エクスは力なくそう問いかけた。

「正確に申しますと、こちらの世界にはなくって、あちらの世界にあるということになりますね」

少女は両手を使い、こちらとあちらを表す。

「つまり、こいつを手放すためには、あの門をくぐらねばならないと……？」

「あー、ええ、そういうことになりますね」

少女は少し考えた後、肯定するように頷いた。

「死のう……」

エクスは脱力したように深く俯いた。

「ええ！？ ダツ、ダメですよ！ 死ぬなんて言わないで下さい！」

少女はまた驚いた。慌てて励まそうとする。

「だって、もう死ぬしかないだろう！？」

エクスは声を荒げた。その目は潤んでいる。顔つきがまた幼いものに変わっている。

「あの門をくくれるわけないだろう！ その前に見つかって殺される！ 例えくぐれたとしても、裏切り者の汚名を着せられた上に、勇者だぞ！？ ペンドラゴンさまを敵に回すことになる！ もう死んでも同然じゃないか……！」

エクスはまた手で顔を覆ってしまった。

「こうなったら、やはりこいつを抱いて海に飛び込むか……！ いや、いつそ、こいつで人間共を根絶やしにしてやろう……！ 聖剣を薄汚い人間共の血で濡らしてくれる！」

エクスは指の間から掲げた剣を見つめた。恐ろしい形相を浮かべているのが、その目を見るだけで分かる。

「なっ、なんとという恐ろしいことを……！」

少女はゾツとし、身震いしている。

「諦めないで下さい！ 馬鹿なことを考えないで！ 鞘がないなら、作ればいいじゃないですか！」

「……なに？」

少女の言葉に引っかけかり、エクスは思わず聞き返した。

「へ？」

キョトンとする少女。

「作ればいい、だと……?」

「え、あれ……?」

エクスは反応に、少女は戸惑っている。

「作れるのか? 鞘を」

「ええ、まあ」

「なっ! ならば、それを先に言え!」

エクスは声を荒げ、剣を持つ手を振り上げた。

「ごめんなさい……!」

少女は頭を押さえてその場にうずくまった。身を守ろうとするような仕草をする少女の姿を、エクスはしばらく睨んでいる。しかし、途中でなんだか馬鹿らしくなって、ふうと溜め息をつき、振り上げていた剣をそつと下ろしてしまった。

「……それで、どうすれば鞘を作れる?」

エクスは間を置き、あらためて問いかけた。

「……さ、さあ?」

少女も間を置いて答える。

「さあ……? さあってなんだ、知らないというのか?」

「はい……」

少女は小さく頷いた。

「私たち一族は、聖剣をお守りするのが使命なので、それ以外に關することはさっぱりで」

少女は上目遣いになり、恐る恐る答えた。

「そんな……」

エクスは意気消沈し、またもがつくりと俯いてしまう。

「あ、でも! 知っているだろうなあって人はちゃんといいますよ! 本当!」

少女は人差し指を立てた。

「……本当だろうな?」

エクスは顔を上げ、訝しげに少女を見やる。

「もちろんです!」

今度は強く頷いてみせる少女。

「そいつはどこにいる？」

「ここから北にオアシスがあるんですけど、そこに小さな集落があって、その集落では、聖剣をこの地に隠すように命じられた聖剣の巫女の末裔の方々がいまでも暮らしています。彼らでしたらきっと、鞘の作り方も知っているはずですよ、はい！」

少女は笑顔で答えた。

「ここから、北だな？」

エクスは一度だけ頷き、素早く立ち上がった。

「あ！ あ！ 私がご案内します！」

少女は拳手しながら立ち上がり、自らエクスの前に立った。すると、彼はあからさまにいやそうな顔をした。迷惑だ、邪魔だ、とそう言わんばかりの顔である。

「……」

少女はその顔を前にするとにも言えなくなり、そつと手を下ろしてしまった。

エクスは目の前に立つ少女を避けて、一人その場から立ち去った。その姿を、残された少女は悲しげに、淋しげに見つめていた。

少女は側にあつた瓦礫に腰かけて、エクスの去りゆく後ろ姿をじつと眺めていた。

しばらく眺めていた。

さらに、しばらく眺めていた。

まだ眺めている。それもそのはず

立ち去ったはずのエクスだが、見えなくなつたと思えばまた現れ、またいなくなつたと思えば、別のところから姿を現す。そんなことを何度も繰り返していた。

降り注いでいた太陽の光が一度途絶え、辺りが薄暗さに包まれ、今度は青白い光が降り注いできた頃、エクスが少女の元に帰ってきた。ひどく疲れた顔をし、少女の前に立つ。

「出口はどこだ……？」

エクスは下を向きながら、小さく呟いた。

「やっぱり、ご案内しましょうか……？」

少女がそう問いかけると、エクスは一度だけ、首を縦に振った。こくりと。

「こちらですっ！」

少女はパツと笑顔になり、元気そうに駆け出した。その後ろを、エクスは頂垂れながら歩いている。大きな溜め息をつきながら……。

すでに夜

空には鋭利な三日月が浮かんでいる。

月明かりに照らされて青白く染まった砂漠を、エクスと少女の二人は、北にあるというオアシスを目指して歩いていた。

昼は灼熱でも、夜ともなればたちまち極寒へと早変わりする砂漠。幸い、今宵は肌寒い程度だった。

エクスは剣を手に、警戒するように右へ左へ視線を泳がせている。昼間のことがあったから余計だろうが、少々警戒し過ぎな感が否めない。

一方、少女はというと、案内役だからエクスの前を歩いているのだが、ぴょんぴょんとスキップでもするように飛び跳ね、たまにくるりと回ってみたりと、ちょっと落ち着きのなさが見て取れる。顔は笑っているから、単に機嫌がいいようだ。なにかに対して喜んでいようなのだが、それがなんなのかは分からない。そんな疑問を、彼女の後ろを歩いているエクスも抱いてはいるのだが、あえて聞くとはしなかった。何故だが知らないが、癪に障る気がして……。

少女が前を歩いているので、いやでもその身なりが目に残る。少女の髪は沈みゆく夕陽のように鮮やかな赤毛。肌の色は小麦とまではいかないものの、健康的な色に染まっている。

砂漠の民らしく、薄い生地衣装を身にまとっている。直射日光を避けるため、極力、肌の露出は少ない。民族的な衣装とでも言ったところか。ベルトの代わりに腰に長い帯を巻きつけてあるのだが、それを後ろで蝶結びにしており、可愛らしい。色は髪と同じ赤。

ときどき、飛び跳ねて後ろを振り返るのだが、その際、彼女の顔が見える。瞳は碧眼。顔立ちは美人と言えるものだ。端整であり、そして、童顔。若干幼く見える。見たところ、年齢は16から18といったところだろうか。などと、エクスは少女の外見を見定め

ていた。

しばらく歩いてみると、風景の一角に明かりが見えた。

湖と呼ぶには小さく、とはいえ、池と呼ぶには大きい水溜まりが、広大なまでの砂漠の一角に現れた。オアシスだ。その周囲だけ植物が群生している。

そのオアシスのかたわらに明かりはあった。きっと、あれが少女の言う集落だろう。

「あそこか？」

エクスは剣でオアシスを指し、問いかけた。

「はい！ あれがオアシスです」

少女は元気よく答えた。

「そうか」

そう言うと、エクスは前に立っている少女を押し退けるようにして歩き出した。風景の中のオアシスを目指して。その後には続かんと、少女も歩き出す。

「……どうしてついてくる？」

エクスはもう一つの足音に気づき、ふいに立ち止まり、後ろを振り返った。

「え、ダメですか……？」

少女も立ち止まった。不思議そうに問いかける。

「案内は済んだだろう。さっさと帰れ」

エクスは顎をしゃくった。

「ええ〜！ せっかく、久しぶりに水浴びしようと思っていたのにい〜！」

少女は声を上げ、手をバタつかせた。

「それで喜んでいたのか……」

エクスは納得し、額に手をやった。頭痛でも訴えるように。

「いいから、帰れ！ 邪魔だ！ 目障りだ！」

エクスは追い返すように、しっしと手を振った。

「ひっ、ひどい……！」

蠅でも追い払わんばかりのその対応のひどさに、少女は目を潤ませる。

「ふん」

エクスは踵を返し、背中を向けると、少女を置いてスタスタと歩いていってしまふ。と思えば、その横を少女が風のように走り抜けた。エクスが「あ！」と声を漏らした頃には、もうずっと遠くへ。

少女は全速力でオアシスへと走って行ってしまった。

「なんて奴だ……」

エクスは呆れ、溜め息を漏らした。

「あれが人間なのか……？」

もう見えなくなってしまった少女の姿を思い出し、エクスは不思議そうに呟いた。

「あまり、変わらないんだな……」

エクスは止めていた足を動かし、オアシスに向かってまた歩き出した。

エクスがオアシスに到着したのは、そうまもなくのことだった。誰かのように全速力で走ればあつという間だったかもしれないが……。

エクスの到着を大勢の人間が待ち構えていた。集落の者たちだろうか、数十人はいる。

エクスは彼らを警戒し、身構える。すると、人々の中から一人の人物が前に出た。腰の曲がった老人だ。杖を突き、ゆっくりとした足取りで歩いてくる。

老人はエクスの前に立ち、その重いまぶたをこじ開けた。じつと彼のことを見やる。

「勇者さま、よくぞいらつしやった」

老人はしわがれた声で言った。

そんな老人の顔の前に、エクスは剣を突きつけた。

「勇者じゃない……！」

エクスは声を荒げた。

「あの女からなにを聞いたのかは知らんが、俺は勇者じゃない。断じて違う。俺はペンドラゴンさまのため、この聖剣を破壊するために来たんだ。だから、勇者などではない！」

エクスは、老人をキツと睨みつけた。

「ふむ。言っておつたとおりの御仁のようじゃのう」

老人は目を細め、溜め息交じりに呟いた。

「言つてあつた？ あの女め、やはりなにか余計なことを言つたんだな……そう言えば、あの女はどこだ？」

エクスは、人々の中に少女の姿がないことに気づいた。

「ん」

すると、目の前の老人を含めた人々が一斉に横を指差した。エクスは反射的にそちらを向いた。皆の指の先、エクスの視線の先にはオアシスがあつた。そのとき、水面からなにかが飛び出した。

少女だ。服を着たままの少女が、水面から上半身を表したのだ。

水しぶきと共に。

「なっ」

エクスは顔を真っ赤に染めた。それもそのはず、少女は服をまとつてはいるが、濡れて透けており、服の下が見えてしまつていた。月明かりがまたそれを強調させている。そうでなくとも、水しぶきの一粒一粒が宝石のように煌めき、月夜のオアシスというシチュエーションがこれまた幻想的な雰囲気も醸し出しているこの状況下、人間に対しての免疫が皆無にも等しいエクスにとっては、赤面当然な光景だつた。

「……」

エクスは無言のまま、そつと視線を落とし、さつと左手で両目を隠した。

「たつ、単刀直入に聞くが！ こいつの鞘を作るにはどうすればいい！？」

エクスはオアシスから顔を背け、両目を隠したまま、右手にある

剣を突き出し、老人に問いかけた。しかし、そちらに老人はいない。
「わしはこつちじゃが？」

エクスは的外れな方向に剣を突き出していた。老人の声を頼りに、慌てて身体の向きを変えた。そつと手をどけて、オアシスを見ぬようにし、あらためて剣を突き出す。

「ふむ、それはまさに聖剣。して、その鞘か……」

老人は険しい表情を浮かべた。

「しかし、勇者ではなく、聖剣を破壊すると言う者に、果たして教えてよいものか……？」

老人は渋るような顔をする。とそのとき、大きな水音がした。

「ぷはあく、気持ちよかったあく！」

少女が水から這い上がってきた。全身ずぶ濡れのままに。彼女は髪を絞り、服も絞りながら、皆の元へ。

「満足したかのう？」

「ええ、もう大満足です！」

笑顔で近づいてくる少女。本当にそのまま飛び込んだらしく、靴からなにから、すべて身につけたままだった。エクスは慌てて顔を背け、また左手で目を隠してしまう。

「それは良かった。じゃあ、誰か、タオルを貸してやりなさい」

老人は自分の後ろに控えている者たちに向かって言った。一人が頷き、すぐに駆け出す。

「え、いいですよ、乾燥していますから、すぐに乾きます」

「うむ、そうなのじゃが、その姿では話が進みそうにないのでな」

さきほど駆け出していった一人がタオルを手に戻ってきた。老人にはなくて、直接、少女の肩にかけてやる。

「せめて、胸だけでも隠しなさい」

「あ、そうですね」

少女は恥ずかしがりもせず、胸が透けていることに気づくと笑って誤魔化した。すぐにタオルを広げ、胸から腰にかけて巻きつけるようにして隠した。

「もう、最悪だ……」

エクスはしかめっ面を浮かべながら、小さく呟いた。

「それでじゃ、本題なのじゃが、本当にこの御仁に話してしまってもよいのか？」

老人は少女を見上げた。

「ええ、大丈夫ですよ」

少女は軽く答えた。

「うーむ、そうは言うがなあ……」

老人はただでさえしわの多い顔に新たなしわを寄せた。

「なにが大丈夫なのか、俺自身も理解出来ん」

エクスは極力少女を見ぬようにし、発言した。

「本人もこう言うてるぞ？」

再び、少女を見上げる老人。

「そうなんですけどお、このままだと一向に進まないというか、手放せなければ俺は海に飛び込んで剣と心中してやるう！ って言うんですもん」

少女は唇を尖らせた。

「なるほど」

老人は納得した。

「本気だからな」

エクスは言った。

「ほらあゝ！」

少女はエクスを指差し、訴えるような目で老人を見やった。

「ふう、分かった、分かった。それじゃああのう、仕方がないということと話してやろう。あくまでも脅されて、強制的に言わされたということじゃ。それならばわしらとしても納得出来るでな」

老人は溜め息交じりに言った。

「あ、それなら、後ろめたくないですね」

少女は笑みを浮かべ、ナイスアイデアだと言わんばかりに柏手を打った。

「俺が言うのもなんだが、いいのかそれで……？」

エクスは呆れ顔を浮かべる。

「じゃが、その前に、場所を移動させてはもらえんかな？ 夜の冷え込みは老体に堪えるでなあ。ついでに、なにか温かいものでも用意しよう」

そう言うと、老人はゆっくりと踵を返し、歩き出そうとする。

「必要ない。長居をするつもりはないんだ、場所や方角さえ分かれば」

エクスがそう言いかけると、

「くしゅんっ！ うう、さぶう……」

少女が大きなくしゃみをした。そんな少女のことを指差しながら、老人はそれ見たことかと言いたげな顔で訴えかけてくる。

「チイツ、分かったよ……」

エクスはあからさまにイラッとした顔をした。舌を打ち、苛立ちを必死に堪えながら、老人の提案に応じる。

「では、こちらに」

老人に案内され、エクスはいくつかあるテントの一つへと入っていった。少女もちゃっかり、その後ろをついていった。

「狭いが、まあ、くつろいでくれ」

老人の言うとおり、テントの中は狭かった。十人も入れないだろう。外から見ても狭いのは明らかで、あらかじめ予想は出来ていたので、エクスは驚きも戸惑いもしなかった。

テントといっても下は地面が剥き出し。天井や壁は、一枚の大きな白い布がその役割を果たしている。

テントの中央で火が焚かれており、その熱で中は温かった。

少女は誰よりも早く火の前に鎮座し、両手を伸ばして、その温かさにホッとしている。老人はその隣の椅子に腰を下ろした。エクスは警戒しているのか、入口のすぐ脇に立つ。

「そこでは充分に身体が温まらぬぞ、ここへ座りなさい」

老人は空いている席を勧めた。

「温かいですよ」

少女も気持ちよさそうな顔をして見せる。

「断る。いいから、さっさと話せ」

エクスは断固として動かず、剣だけを突きつける。

「じゃが、そこではスープを出すのに一々立たねばならん」

老人は火の上に吊るされている鉄の鍋を、枯れ木のような指で指差した。お玉を取り、火から離れたところに積まれてあった椀を一つ取り、鍋の中のスープを一杯分よそった。それをまず少女に手渡した。

「いらん……！　そもそも、誰が食べると言った？　貴様ら人間の作ったものなど、信用出来るか。なにが入っているか分かったものじゃない……！」

エクスは頑なだった。決して意思を曲げず、欠片ほども立ち入る隙を見せない。しかし、意思はそうでも、身体は正直な反応を見せてしまう。

グウウ……ッ

音がした。エクスの腹から聞こえた。

「……」

エクスは急に押し黙り、頬を赤らめる。

「美味しいですよぉ？」

少女はニヤリと微笑むと、意地悪そうな顔をし、食べるところを見せつけた。

「いつ、いらんと言って」

グウウ……、キュルルウ……

また、エクスの腹の虫が鳴った。悲鳴を上げるように。
「毒なんか入っていませんよ？」

少女はまた、スープを一口すすって見せる。そして、美味しそうな顔をした。

「ほれ」

老人はもう一つの椀に一杯のスープをよそい、空いている椅子の前に置いた。

「……」

エクスは顔を赤らめ、ひどく躊躇っている。

「冷めちゃいますよお？　せっかく、こんなに美味しいのにい。今日はお肉も入っているのにい」

少女は誘惑するように、猫撫で声で呟いた。

「……わっ、分かった！　分かったよ！　食べてやるよ！」

エクスは苛立たしそうに空いている席へと歩み寄り、どつかと腰を下ろした。

「ただし、なにか妙な動きをしたら、そのときは容赦しないからな

……」

エクスは二人に睨みを利かせた。

「しませんよ、疑り深い人ですね」

少女は眉をしかめた。

「おまえさんのような手錬を相手にしようとは思わん」

老人は頷いた。

「ふっ、それが賢明だ」

エクスは不敵な笑みを浮かべると、目の前にある椀を取ろうとする。そのとき、両手で取ろうとするも、剣があることを思い出してその手を止め、今度は左手だけで取り上げた。しかし、それではスプーンが持てず、仕方なく、椀から直接スープをすすめるのだが、これまたしかし、スープに入っている具が大きくて、スプーンがないと非常に食べ辛い。

「不便そう……」

「もう少し、小さく切るべきじゃったかのう」

試行錯誤しながらなんとか食べているエクスの姿を見つめ、少女

と老人は同情でもするようにそう呟いた。二人の声は聞こえているが、エクスはもはやなにも言いたくないのか、無視し、無言のまま食べることに集中している。

「……悪くない。ダシが利いているな」

スープをすすり、味わいながらエクスは呟いた。

「そうじゃろう。その肉がよいダシを出す」

老人は笑顔を浮かべ、鍋の中に浮いている肉を指差す。

「この肉はなんの肉だ？ 妙に歯ごたえがあるが……」

確かに歯応えがある。エクスが顎を上下する度に、ゴリツ、バリツ、となにかが砕けるような音がする。

「ん」

老人はおもむろに頭上を指差した。

「？」

エクスはその指を追い、見上げた。すると、天井の役目をしている布を支える細い柱になにかが吊るされているのを見つけた。それは焚き火の煙に燻されて燻製になった、何匹もの小さなサソリだった。

それを見つけた瞬間、エクスは目を丸くした。と同時に、口に含んでいた肉をごくりと飲み込んでしまった。塊が喉の奥へと押し込まれる。

「色々想像はしていたが、人間というものがますます分からなくなつた……」

エクスはひどくげんなりしつつも、悲しいかな空腹には勝てず、また美味にも勝てず、どこか嫌々スープをすすっている。ときどき頭上を見上げては、吊るされているサソリの有り様に表情を曇らせていた。

「？」

少女と老人は、そんなエクスのことを不思議そうな顔で眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0740ba/>

くそったれ聖剣伝

2012年1月8日19時45分発行